

アゴスティノ・ステウコ

—「永遠の哲学」のはじまり—

Agostino Steuco
—The Dawn of the Perennial Philosophy—

枝村 祥平
Shohei Edamura

「永遠の哲学」は思想史上重要なキーワードの一つであるが、時代により少しずつ異なった文脈で使用されてきた。20世紀をみると、例えばオルダス・ハクスレーの『永遠の哲学 (*The Perennial Philosophy*)』(1946年出版)では、キリスト教の聖人の言葉、ヒンドゥー教の聖典、仏陀や高僧の言葉、老荘の文献に共通する、精神的な救済と慈愛・平和をもたらす、いつになっても必要とされ色あせない思想をあらわす語となっている¹。第二次世界大戦で疲弊した国際社会へのメッセージという性格ももつこの本の冒頭でハクスレーは、「永遠の哲学 (*philosophia perennis*)」はライブニッツによって使われ始めたフレーズだ、と述べている²。確かにライブニッツは、1714年のニコラ・レモン宛書簡で次のように書いている。

真理はひとが思うより広まっています。しかし、粉飾されていたり、またはっきりしなかったり微かになったり削られていたりすることが非常に多いです。付け加えによってゆがめられ、真理がそこなわれたりあまり有用でなくなっていることもあります。古代人たちがあるいは(もっと一般的に言って)先人たちにおけるこの真理の跡を見出すなら、泥から黄金を、鉱石からダイヤモンドを、闇から光を取り出すことになります。それこそ、永遠の哲学というものなのです。³

そして実際ライブニッツは、ここでいう「永遠の哲学」を実践していた。つまり彼は、プラトンの宇宙創造論・魂の不死論や、アリストテレスの一と存在についての考察などを自らの哲学に活かすのみならず、古代中国の哲学にも関心を持ち、そこに17世紀にも通用する真理を見出していたのである。ただ、ライブニッツ以前にも「永遠の哲学」という表現は使用されており、この点でハクスレーは正しくない。具体的には、C.B. シュミットが記しているように、アゴスティノ・ステウコ(1497-1548)がライブニッツ以前にこの語を使い、彼に影響を与えた、ということになる⁴。実際、ステウコは『永遠の哲学について (*De perenni philosophia*)』で、地域・時代に左右されない哲学

(特に神学・宗教哲学)があり、それは様々な文献に反映されているに違いないと論じている。確かに、「永遠の哲学」は語義からして、15世紀以前にもあるだろうし、そもそも時間的起源をもたないとさえいえる。ただ、実質的には永遠である(かもしれない)内容に、新たな名が与えられ、自覚的にそれが探求されたという点に着目するならば、ステウコの著作はそうした自覚的探求の嚆矢といえるだろう。思想史的に「永遠の哲学」概念の形成を明らかにしようとするのであれば、ステウコについての考察は欠かせないと思われる⁵。そこで本論では、まずそれほど知られてはいないステウコについての伝記的事実を整理し(1節)、『永遠の哲学について』の内容を概観する(2節)。そして、ステウコがフィチーノやピコといった先人から受けた影響を考察し(3節)、付論としてステウコとライブニッツとを比較して両者の特徴を浮き彫りにする(4節)。

1. ステウコの伝記

アゴスティノ・ステウコは、宗教改革期におけるイタリア生まれのカトリックの人文学者・神学者であった⁶。旧約聖書の研究者、新プラトン主義哲学者、そして反宗教改革の論客としても知られている。

ステウコは1497年現在イタリアのペルージャ県にあるウンブリアの町グッビオ(Gubbio)に生まれた。グッビオは古くはエウグビウム(Eugubium)といい、ステウコは生まれにちなんだ別名エウグビヌス(Eugubinus)で呼ばれることもあった⁷。

ステウコは16歳のとき、ボローニャにあった聖アウグスティヌス修道会に加わった。そこで学識ある聖職者たちと交わり、人文主義的な教養を身につけ、またキリスト教思想のなかでも新プラトン主義に基づいたものに惹かれるようになった。1525年には教育を終えたステウコは、ヴェネツィアに送られ、そのサンアントニオ=ディ=カステッロ教会で教育と研究をはじめた。1529年から36年までは北イタリアのレッジョで参事会長をつとめた。そして彼の著作は教皇パウロ3世の関心をひき、その縁でステ

ウコは1536年にいたるまで教皇庁に所属することになった。また、1538年にはクレタ島キサモスの大司教とヴァティカンの図書館司書を兼任し、ポーニャで開かれたトリエント公会議の教皇特使もつとめた。さらに、ローマのヴィア・ヴィタ（今日のコロソ通り）を改修するという街づくりプロジェクトにも携わった⁸。このように順調なキャリアを歩んだステウコであったが、1548年2月、ちょうどトリエント公会議が中断されていたときにヴェネツィアで病気にかかり、3月に亡くなった。

ステウコは著作において、歴史的、哲学的、神学的問題を幅広く取り上げた。ギリシア語だけでなくヘブライ語にも堪能であり、『旧約聖書注解 (*Recognitio veteris testamenti* 1529年出版)』、『宇宙創造 (*Cosmopoeia* 1535年出版)』、『詩篇注釈 (*Enarrationes in psalmos* 1548年出版)』などはヘブライ語力を活かしたものであると言える。ステウコのモーセ五書（つまり『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』）についての論考は旧約聖書研究を大きく前進させたといわれ、実際彼はヘブライ語の写本を使って、ジェロームのラテン語訳における多くの誤訳・誤植を訂正した。

ステウコは『ルター派に対するキリスト教擁護論 (*Pro regione Christiana adversus Lutheranos*)』では明確に宗教改革を批判している。彼は、ヴェネツィアにおいてはカトリックの典礼が社会的・政治的にきわめて重要な意義をもっているとする。その上で、カトリックの典礼を否定するルター、エラスムス、イタリアの「福音派 (*Spirituali*)」などは、ヴェネツィアにとって社会的脅威とならざるを得ない、というのである。ステウコの著作によって、エラスムスは当時のイタリア人たちにルター由来の宗教改革を擁護し推進する人物であるとみなされるようになった。1531年4月、エラスムスは怒りをあらわにした書簡を送ってきたが、ステウコは8月にこれに返答した。また1547年には、ステウコは『ロレンツォ・ヴァラのコンスタンティヌス寄進状偽作論論駁 (*Contra Laurentium Vallam de falsa donatione Constantini*)』を書いた。寄進状は、ローマ皇帝コンスタンティヌス1世がキリスト教に帰依するだけでなくカトリック教会に教皇領を寄進することを示した文書だとされていたが、ヴァラはこれが後世の偽作であり皇帝自身が書いたものではないと論じた。ステウコはヴァラに対抗して文書が真正であると論じ、人文主義者たちからの批判に対してカトリック教会の権威を擁護したのである。

このような護教論的な執筆活動をしてきたステウコの著作のなかにあつて、『永遠の哲学について (*De perenni philosophia* 1540年出版)』は例外的に人文主義者たちの著作と親和的なものといえる。彼はそこで、古代哲学とキリ

スト教に共通する思想的基礎を模索しているが、以下ではこの著作を各巻の内容を確認しつつ概観する。

2. 『永遠の哲学について』の内容

序文では、古代ギリシアの哲学は、キリスト教が流布する以前のものであるが、自然や動植物の探求、人間やより上位の存在のあり方についての議論など、やはり優れたところが多いと述べられる。そこでこの著作では、古代の著作をギリシアのみならずエジプトやカルデア由来とされるものも含めて幅広く吟味していこう、というのである。さらに、この著作は聡明な教皇パウル3世に捧げる旨が明言されている。

第一巻では、真理がアダムやノアから16世紀まで脈々と受け継がれているとされ、真理の価値が強調されてはじまる⁹。第一巻の主たるテーマは、神の父性と子性である。神の父性はしばしば、創造者としての性格とともに語られる。ステウコは神による創造 (*creatio*) とともに、神の製作者 (*opifex*) としての性格を語り、プラトンの『ティマイオス』ではこの製作者としての性格が明確にされているという。神はまた最高の命をともなった光 (*lux*)¹⁰であり、それによって放射的に諸事物が生成される。神に対する形容としては他に、火 (*ignis* ゴロアスターによる)¹¹、泉 (*fons*)¹²、原理 (*principium*)¹³などがある。神が諸事物を創造するにあたっては、言葉 (*verbum*)、ロゴスは諸事物の原型 (*archetypum*) としての役割をはたす¹⁴。諸事物を生み出す父としての神に対して、キリスト教神学では、最完全 (*perfectissimum*)、最大 (*maximum*)、最も卓越的 (*eminentissimum*)、といった形容もなされるが、それらを予感させる思想内容がプロティノスの哲学にはある¹⁵。ピュタゴラスが神をモナス (*μονάς*) と呼んでいたことにも触れられ、ステウコによればこれは、神が一性であり (*Unitas*)、しかも善そのもの (*ipse Bonus*) であることを示している¹⁶。一方『出エジプト記』にある、よく知られた言葉「我はあるところのものである」にも触れられ、存在 (*ens*) も神に帰されている¹⁷。

第一巻では「神の子」も論じられ、古代においてそれがしばしばアナクサゴラスに由来する精神 (*νοῦς*) の語と結び付けられたとされる¹⁸。マクロビウスには「至高善の娘 (*filia summi Boni*)」という表現があるが、これも神の子のことである¹⁹。第一巻ではさらに三位一体も論じられていて、プラトンは、神、精神、魂という三つを取り上げ、それらが一体であると示唆していたという²⁰。

第二巻では、第一巻よりさらに重点的に、ギリシアおよびその他の地域の古代人がどのようにして三位一体をほめかけたかについての考察が進められる。例えばプラトン

²¹、プロティノス²²、プロクロス²³、モーセ²⁴、ヘルメス²⁵、アウグスティヌス²⁶、アポロン神託²⁷において、神の三性がどのように論じられたかが紹介される。そして、古代ギリシア人は他の地域の人々を「野蛮人」と呼んだが、哲学自体がいわゆる野蛮人の文化に負っているともされ、ギリシアの哲学とエジプト人、ヘブライ人、カルデア人などの哲学が共通点をもっていることが確認される²⁸。父としての神は、皇帝（命令者 *imperator*）、指導者（*rector*）でもある²⁹。またウェルギリウスの『アエネイス』で、神の霊が「世界靈魂（*anima mundi*）」として語られているとされる³⁰。

第三巻は神の単一性が大きなテーマとなっており、例えばプラトン、アリストテレス、ホメロス、デモステネスが神の単一性をどのように示していたかが論じられている³¹。そして、いにしへの哲学者たち（*prisci philosophi*）が共通して、一なる神からすべてが生まれるという思想を、神から与えられた理性に基づいて論じていることが示唆されている³²。すべての有限なものたちを生み出す、当の神そのものは、不動の原理（*immobile principium*）だとされる³³。さらに古代人たちによって、神が無限そのもの（*ipse infinitas*）³⁴と呼ばれていたこと、神が広大無辺性（*immensitas*）³⁵をもっておりにわかにはそのあり方を測りがたいことも確認される。一方で、汎神論を彷彿する議論も紹介され、古代人が神をすべてのものそのもの（*ipsum universum*）³⁶と呼んだこと、世界は神の似姿（*imago Dei*）³⁷とされたことにも触れられる。ただステウコは、神はやはり世界を超越していることをも確認している。

第四巻ではアリストテレスが大きく扱われる。まずアリストテレスがどのように神を名づけ定義したかが論じられ³⁸、神は全知であり³⁹、もっとも幸福であることは、（いわば神にならうような仕方）で観想することに他ならないという⁴⁰、アリストテレスの主張は正しいとされる。また、アリストテレスが宇宙のもろもろのものが秩序づけられていることをどう論じていたかも紹介され、例えば星の軌道と「神々」、つまり唯一神ではなくそこから生まれた完全性の高い存在（キリスト教でいえば天使たち）の関係⁴¹、諸事物の整調（*coordinatio*）と摂理がどう捉えられていたかも述べられる⁴²。そして、一人一人の人間は寿命があるが、人間の本質は永遠であり、その意味で「人類、人という類」が永遠であるという思想も紹介される⁴³。さらに、アリストテレスの哲学は神を創造者とする考えと排除するわけではない、ともいう⁴⁴。また四巻では、われわれにとっての法は（つきつめれば）、何らの訂正の余地のない神に等しいともされ⁴⁵、神が規範の源泉となっていることが示唆される。また神は、皇帝・独裁官（*imperator, dictator*）⁴⁶、君主・王（*Monarchia, Rex*）⁴⁷としても位置付

けられ、神が人間のふるまいの良しあしを審判することも示唆される。さらにキケロ『神々の本性について』が後半で頻繁に引用され、アリストテレスとの共通点が論じられる。

第五巻では、プラトンが至高の、ただ一人の神をどう論じたかがテーマである。まずプラトンが書簡で真の神は一人と述べたことに触れられる⁴⁸。プラトンによると神は二種類であり、知性的な至高の神と、彼から派生するもろもろの霊的存在である⁴⁹。至高で唯一の神は創造主であり、このことはエジプト人やカルデア人も認めていたところである⁵⁰。また後世では、キケロがこのことを認めた⁵¹。そしてプラトンによると、神はもっとも善でもっとも美しくもっとも真であり、すべての善なるものの作者ではあるが悪の作者では決してない⁵²。最後に、創造の教説が、様々な古代人（ピュタゴラス、タレス、エンペドクレス、パルメニデス、アナクサゴラス、エウリピデス、ピンダロス、ヘシオドス、デモステネス）によって示唆されていることを確認して終わる⁵³。

第六巻では、神と被造物としての自然との関係が論じられる。プラトンやセネカによると、神は製作者である⁵⁴。神は万物の主であって、永遠のアイデアを駆使して自然を創造する。プルタルコスによれば、創造された自然は神の道具であり、神の栄光をあらわす⁵⁵。神は自然のうちに調和をもたらす⁵⁶。そして自然のうちに見いだされる運動は神を原因としており、自然のうちにはいたるところに神の力・衝撃力（*vis, impetus*）が働いている⁵⁷。このような真の神についての知こそ、認識による快である⁵⁸。そして真の知に基づいた宗教は、エピクテトス、イアンブリコス、ポルピュリピオスなどによりほめかされていたのである⁵⁹。

第七巻では、世界の創造が主たるテーマである。神だけが永遠であり、世界は永遠ではないというのがステウコの考えであり⁶⁰、世界が永遠であることを認める説が批判的に取り上げられる⁶¹。世界が永遠であるとみとめることによって人は不敬虔になってしまい、むしろ神のみを永遠と認めることが敬虔につながるというのである⁶²。神は単純な一であって、変化するものは多なるものであるから、世界を創造したからといって自らは変化を被らない⁶³。そしてステウコは、自身の宇宙創造についての理解に引きつけてアリストテレスを解釈しており、アリストテレスは混沌から秩序ある世界が生じることは否定したが創造の教説そのものに反対していたわけではない、と論じている⁶⁴。そしてローマ時代の詩でも、光、エーテル、水がいかに創造されたか、闇や混沌がどのようなものかが、例えばオウィディウスの『変身譚』に示されている⁶⁵。一方ルクレティウスは創造の教説を否定しているが、彼は不敬虔でありそ

の誤りは明らかであるとされる⁶⁶。

第八巻では、天使および霊（ダイモーン）が論じられる。ステウコは、プラトン、アリストテレスが天使という言葉を使わずに神より下位で人間より上位の存在を積極的に論じていた、という⁶⁷。そして、カリマクス、ホメロスの詩、キケロの著作においても実質的に天使が論じられているとされる⁶⁸。また、ディオニシオス、プロクロスにおいては、天使の三つの位階が論じられているという⁶⁹。それはつまり、熾天使ら最上位と、主天使以下の中位、そして権天使以下の下位である。天使と同一視される良きダイモーン（例えばアポロンの神託で人間を善き方向に導くような）とともに、悪しきダイモーン、偽りのダイモーンもいる⁷⁰。そうしたダイモーンは神に対抗し大なる悪をもたらす、墮天使とも同一視できる存在である⁷¹。ホメロスにおけるタイタンやギガンテスも、悪しきダイモーンだとみなすことができる⁷²。ただ古代でも良きダイモーンといかに交流すべきかが語られており、例えばヘルメスは天使を通じた神と人間との関わりを論じた⁷³。

第九巻では、人間が創造された過程・魂の不死が論じられる。魂は神的なものから生まれ、不死という名誉を授かる⁷⁴。プラトンやキケロが言うように、人間はもっとも高貴な、敬虔な動物であり、神に類似している⁷⁵。アリストテレスやキケロは、理性が人間の魂のうちで神的な部分であると認識していたし⁷⁶、プラトンが看破したように、人間の魂は神による「永遠の作品」であって、魂の不死をみとめていないアヴェロエスは誤っている⁷⁷。魂は生命の主であり、エピクテトスのいうように、調和をもった身体を支配し⁷⁸、肉体が減じた後も天国という座で安らうのである⁷⁹。ただ、罪を犯した場合は魂はしかるべき罰を被らなければならない⁸⁰。哲学者以外の著作をみても、例えばオウィディウスの作品では、プロメテウス神による人間の創造が語られているし⁸¹、ノアのような人物が洪水を生き延びた逸話なども見いだされる。またカルデア人の神託をみると、人間の創造や人類の始祖アダムについての話がある⁸²。

第十巻は、哲学と宗教、キリスト教の関係を扱う。もろもろのもの終局・目的は敬虔であり、敬虔な心をきちんともたらすことができるのはキリスト教だけだとされる⁸³。そして、宗教なしには人間は極めて悲惨な状態にあるというのである。哲学者たちは、敬虔が主要な徳であるとしている⁸⁴。真の哲学的知は、神を知ることにある⁸⁵、真の宗教はキリスト教のみである⁸⁶。プラトンによると真の知は魂をこの世界から逃れさせる⁸⁷。地上において神の観想ほど幸福をもたらすものはなく、このことはキリスト教と合致する⁸⁸。神についての知は、神の正義や法についての知もたらす。プラトンもアリストテレスも、神の正

義について語っている⁸⁹。人間は正義や法を認識し、自由な働きによってそれらに従い、「神の模倣」をすることができる⁹⁰。そうした正義にかなう行いは、よい意味でソクラテス、プラトン、キケロが語ったような、「身体を離れること」⁹¹、この世の生を終えた後の幸せをもたらすであろう⁹²。一方で罪次第では、人間の魂は不死なので消滅はしないが地獄へと向かうであろう⁹³。

3. フィチーノ及びピコとの比較

以上にみたように、『永遠の哲学について』は、ギリシアのみならず、エジプト、ヘブライ、カルデアなどの古代人の言葉を幅広く引用した上で、彼らの思想に共通する、16世紀以降においても真理として受け止めていくべき哲学を取り出すことを試みた著作である。そして必要に応じて、古代人の言葉のなかに誤りがあれば、これを指摘もしている。ステウコによると、未来永劫にわたって、真に優れた哲学、神学はキリスト教に属するものでなければならない。それを忘れ逸脱した哲学は、真理から離れたものと言わざるを得ない、ということである。一方永遠に正しい哲学を通じ神を認識して生きることで、「永遠の幸福 (Perennis Felicitas)」⁹⁴を享受することができるのである。ステウコにとって「永遠の哲学」は、良くも悪くも未来志向の概念を表す語であり、同年代だけではなく後世の人々をも拘束するような思想を指しているといえる。

ステウコの試みには、明らかにマルシリオ・フィチーノ (1433-99) やジョヴァンニ・ピコ＝デラ＝ミランドラ (1463-94) のものとの共通点がある。つまり、フィチーノもピコもともに、古代には正当な神学を提示していた「いにしへの神学者たち」がおり、彼らの思想を探ることが適切な温故知新であると考えていたのである⁹⁵。そして、ステウコはフィチーノやピコを『永遠の哲学について』で名指ししてはいないものの、この著作には彼らからの影響が認められる点はいくつかある。

まず第一に、ステウコ自身が「いにしへの神学 (prisca theologia)」⁹⁶というフィチーノが使っていた語を使用している点が挙げられる。また「いにしへの哲学 (prisca philosophia)」⁹⁷、「いにしへの哲学者たち (prisca philosophi)」⁹⁸、「いにしへの人々の見解 (sententia priscorum)」⁹⁹というものもある。

ステウコが、正統な思想を提示していると考えている人物は幅広く、その意味では彼は、いにしへの神学者の範囲を絞ろうとしたフィチーノよりも、多くの人物をこのカテゴリーに含めたピコに近い¹⁰⁰。ステウコが考えたいにしへの哲学者たちは、第三巻第三章では、ピュタゴラス、アルキタス、ピロラオス、アスクレピオス、アクモネ、ヘルメ

スである。さらに、彼らに並んでオルペウス、エンペドクレス、メリッソス、アナクサゴラス、ベレキユデスも取り上げられ、これらの人物も実質的にはいにしえの哲学者たちに数えあげられているとよい。第四章は、第三章ほどははっきりといにしえの哲学者たちが誰であるか示していないが、アスクレピオス、アクモネ、ヘルメスに加え、タレス、ラエルティオス、キケロ、クセノフォンなどが取り上げられている。

第二に、モーセの教えとギリシアの哲学者たちの説が調和すること、およびエジプト人たちの教えとギリシアの哲学者たちの説も調和することなどは、ステウコもフィチーノやピコとともに強調するところである。

一方で、ステウコにはフィチーノやピコとは異なる点がある。第一に、ステウコにはピコに比べると反動的な側面がある。ピコはユダヤ教のカバラ学者たちを高く評価し、彼らの思想をモーセに由来する聖なるものとみなした¹⁰¹。一方ステウコは、キリスト教至上主義を貫いており、ピコほどカバラ学者たちを高く評価しようという姿勢はみられない。この後の、ライプニッツが「永遠の哲学」を実践するにあたりユダヤ教徒の学者やイスラム教徒の学者のみならず、古代中国の人物たちをも参照したという思想史上の展開をみれば、ステウコの姿勢は包括性に関して少し後退しているとみることもできる。

第二に、ステウコは魔術についての議論を積極的にはしておらず、魔術を好んで論じたフィチーノやピコとは著しく異なる。ただステウコは、弱き魂は、生得的な神についての知識を呼び覚ますために（魔術ではないが）儀礼・儀式を必要とすると考えた。つまり、理性的考察よりもカトリックの儀礼が無知な人々に宗教心をもたらす、というのがステウコの考えであった。この点を見ると、ステウコは、17世紀以降にみられる脱魔術化・儀礼の簡素化という文化を完全に先取りしているとまでは言えない。

第三に、ステウコは、フィチーノやピコよりも重点的に天使の墮天について論じている。フィチーノも、悪霊の存在を認めているが、もともと善だった霊が墮落した過程についてはあまり語ってはいない。フィチーノやピコももとより敬虔なキリスト教徒であったが、ステウコは彼らよりもカトリック教会の重職を担い、中枢部にいたので、天使の墮落をより活き活きとつきつけるように描くことで人々を感化したいという思いが強かったのかもしれない。

4. 付論：ステウコとライプニッツの比較

ライプニッツは明示的にステウコに言及しているが、批判的に扱っているときもある¹⁰²。例えば1697年のトマス・バーネット宛書簡では、ライプニッツは同じ主題の本であ

れば『永遠の哲学について』よりもフィリップ・ド＝モルネー（1549-1623）の『キリスト教の真理について』（*De la vérité de la religion chrétienne* 1581年出版）の方が上出来だというのである¹⁰³。確かに、ステウコの『永遠の哲学について』には、冗漫なところや章のなかで特に重視されている主張が何であるのか見えにくいところがある。加えて、ライプニッツはルター派プロテスタントに属し新旧教会の合同を模索したので、プロテスタントを排除しようとしたステウコよりも、プロテスタントの一派ユグノーに属しカトリック教徒との共存をはかったド＝モルネーにより親近感をもったのかもしれない。

とはいえ、ライプニッツの書いたものをみるとステウコと共通する主張も見受けられる。第一に、ライプニッツはオウィディウスやキケロといったローマ時代の人物の著作に普遍的な神学を見出している。1714年に古代の諸民族の哲学・神学についての講演に使用されたテキストである『ウィーン講演』をみると、ライプニッツはステウコと同様にオウィディウス『変身譚』において人間の創造、洪水などが語られていることを確認しているし、キケロの『神々の本性について』に着目もしている¹⁰⁴。ライプニッツはここで、真の神が一人であるという旨のアンティステネスの発言に、キケロが着目していることを紹介している。

第二に、ライプニッツはプラトンが三位一体を認識していたとしている。つまり、「父、われわれのヨハネがロゴスと呼ぶ精神、そしてキリスト教徒が聖霊と呼ぶ魂を神的本性に位置づけていた」というのである¹⁰⁵。

第三に、ライプニッツもいわゆる野蛮人、つまり古代におけるギリシア人以外の人々の哲学を先駆的なものとして認めている。つまり、イスラエル人、カルデア人、アラブ人は神の一性を認識しており、インド人は魂の不死性を認識していた、というのである¹⁰⁶。

第四に、ライプニッツはステウコと同様、自然の諸事物に「魂的なもの」があることを認めている。ステウコは、究極の運動の原因は神であるが、月、星、自然の諸元素にも、魂的なものがありそれらを動かしている、という¹⁰⁷。一方ライプニッツもよく知られているように、自然界のいたるところにモナド、つまり魂に類比的で自発的な作用と表象をもつ単純実体が含まれている、と主張している¹⁰⁸。

それでも、ライプニッツには明らかにステウコと異なる点もある。第一に、ライプニッツにとってギリシア人は理性を駆使することにかけて古代に冠絶しており、その意味で別格であった¹⁰⁹。そのような形でのギリシア人の称揚は、ステウコにはみられない。ステウコにとって重要なことは、ギリシア人、エジプト人、カルデア人、そしてヘブライ人などが共通の普遍的な宗教的真理を認識していた、

という点に尽きる。

第二にライプニッツにとって哲学は、各時代の哲学者による理性の駆使によって前進させられるものであり、発展性を有する。一方ステウコにとっては、永遠の哲学はすでに与えられており、哲学者にとって、人類にとっての課題は、これを忘却したり歪曲したりせず伝えていくことにある¹¹⁰。

第三にライプニッツは、ステウコに比べれば護教論者としてのモチベーションが薄く、ユダヤ=キリスト教の伝統を彼ほど強調することはない。例えばライプニッツは、古代中国の文化英雄とされる伏羲（ふつき）が古代ユダヤ人を教導したことさえ示唆している¹¹¹。

第四にステウコは、時代的な制約から中国古典に目を通す機会がなく、中国哲学に永遠の哲学が含まれているか否かを論じることができなかった。後にイエズス会の宣教師たちが明や清にわたってヨーロッパ人に中国思想を紹介し、これを受けてライプニッツなどは中国哲学を永遠の哲学の理念に照らして吟味することができたのである。

結語

ステウコはカトリックの護教論者であったが、一面異教的な伝統に寛容であった。彼の姿勢は、後に批判を招くことにもなる。例えば、一者を父とし、知性ないしロゴスを

子、靈魂を聖霊とする、新プラトン主義のキリスト教流の読み替えは、ともすれば一者=父のみが神であるというアリウス派の結論をもたらしてしまうのではないか、そしてアリウス派は古代から三位一体を否定する異端とみなされてきたわけであり、ステウコが許容したような読み替えは危険ではないか、という指摘があったのである¹¹²。しかし、長い目で見れば、今も続くカトリックのエキュメニカルな活動につながるような仕事をステウコは成し遂げたということになるだろう。そしてその余波は、カトリック教会の枠を超えて思想史に見受けられるのである。

最後に、「いにしへの神学」ないし「哲学」ではなくあえて「永遠の哲学」を著書のタイトルとしたステウコの思想史上の功績について総括したい。ステウコはフィチーノやピコよりも強く、自らの活動を未来の世代によって受け継がれなければならないものと規定したとすることができる。確かに、ステウコが考えた永遠の哲学の内容は硬直したものとみられるかもしれない。それでも、哲学的模索という活動を絶やすべきでないことがより力強く語られたことは注目されてしかるべきである。また、ステウコの思想内容が偏ったものにみえるとしても、それは信教の自由に従った国家内での複数の宗教、宗派の共存といった社会的条件を受け入れてきた21世紀人の色眼鏡を通したものであり、その見方自体が相対化されうることも考慮する必要があるだろう。

略号：

A = G.W. Leibniz, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Cited by volume and page.

DPP = Agostino Steuco, *De perenni philosophia*, Cited by book and chapter.

GP = G.W. Leibniz, *Philosophische Schriften*, Cited by volume and page.

HD = Giovanni Pico della Mirandola, *Oratio de hominis dignitate*, Cited by the page number of *Über die Würde des Menschen*, translated by N. Baumgarten, 1990, Hamburg: Meiner.

O = Marcilio Ficino, *Opera Omnia*. Cited by volume and page.

TP = Marcilio Ficino, *Theologia platonica*, Cited by book, chapter and section.

W = G.W. Leibniz, *Wiener Vortrag*, In "Leibniz, Platonism and Judaism: The 1714 Vienna Lecture 'The Greeks as Founders of a Sacred Philosophy'" In D.J. Cook, H. Rudolph and C. Schulte eds. *Leibniz und das Judentum* (pp. 95-113), 2008, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

文献

Ackermann, R. (1962). "Augustinus Steuchus" In Kurt Gallig ed. *Die Religion in Geschichte und Gegenwart VI* (p. 364). Tübingen: Paul Siebeck.

Copenhaver, B. P. (2016). "Giovanni Pico della Mirandola," *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.

Copenhaver, B. P. and C.B. Schmitt (1992). *Renaissance Philosophy*. New York, NY: Oxford University Press.

Delph, R. K. (1994). "From Venetian Visitor to Curial Humanist: The Development of Agostino Steuco's Counter-Reformation Thought." *Renaissance Quarterly* 47: 102-139.

— (2007). "Renovatio, Reformatio, and Humanist Ambition in Rome." In R.K. Delph, M.M. Fontaine and J.J. Martin eds., *Heresy Culture, and Religion in Early Modern Italy* (pp.73-92). University Park, PA: Pennsylvania State University Press.

- Ferrer, J. N. (2000). "The Perennial Philosophy Revisited." *The Journal of Transpersonal Psychology* 32(1): 7-30.
- Granada, M.A. (1994) "Agostino Steuco y la *perennis philosophia*." *Revista de Filosofia* 8: 23-38.
- Huxley, A. (1946). *The Perennial Philosophy*. London: Chatto & Windus.
- Martin, J. J. (2007). "Renovatio and Reform in Early Modern Italy." In R.K. Delph, M.M. Fontaine and J.J. Martin eds., *Heresy Culture, and Religion in Early Modern Italy* (pp. 1-18). University Park, PA: Pennsylvania State University Press.
- Samsel, P. (2011). "Perennial Philosophy." In M. Jürgensmeyer & W.C. Roof (Eds.), *Encyclopedia of Global Religion*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Schmitt, C. B. (1966). "Perennial Philosophy: From Agostino Steuco to Leibniz," *Journal of the History of Ideas*, 27: 505-532.
- Walker, D. P. (1972). *Ancient Theology*. London: Gerald Dukworth.
- Walker, R. E. (1996). "Agostino Steuco." In H.J. Hillebrand ed. *The Oxford Encyclopedia of the Reformation IV* (pp. 211-213). New York, NY: Oxford University Press.

注：

- 1 Huxley, 1946; Samsel, 2011参照。
- 2 Huxley, 1946, p. 1参照。
- 3 "La verité est plus repandue qu'on ne pense, mais elle est tres souvent fardée, et tres souvent aussi envelopée et même affoiblie, mutilée, currumpue par des additions qui la gâtent ou la rendent moins utile. En fasant remarquer ces traces de la verité dans les anciens, ou (pour parler plus generalement) dans les anterieurs, on tireroit l'or de la boue, le diamante de sa mine, et la lumiere des tenebres; et ce seroit en effect perennis quaedam Philosophia." GP. 3.624-625 河野与一訳を参考にした。岩波文庫『单子論』196-7頁参照。
- 4 Schmitt, 1966, p. 506参照。
- 5 J.P. フェレールは、現代における「永遠の哲学」の概念が新プラトン主義のもとにあったルネサンスのキリスト教徒の学者たち（フィチーノ、ピコ、クザーヌス、ステウコ）のエキュメニカルな活動の産物であると述べている。Ferrer, 2000, p. 8参照。
- 6 以下ステウコの伝記的事実は、主として Ackermann, 1962; Delph, 1994; Walker, 1996に依拠して整理した。
- 7 日本基督教団出版局『キリスト教人名辞典』779頁参照
- 8 Martin, 2007; Delph, 2007参照。
- 9 DPP. 1. 1
- 10 DPP. 1. 22
- 11 DPP. 1. 12
- 12 DPP. 1. 9, 1. 16
- 13 DPP. 1. 12, 1. 16
- 14 DPP. 1. 26
- 15 DPP. 1. 16
- 16 DPP. 1. 12
- 17 DPP. 1. 14, 1. 28
- 18 DPP. 1. 4
- 19 DPP. 1. 6
- 20 DPP. 1. 14, 1. 18
- 21 DPP. 2. 4, 2. 8
- 22 DPP. 2. 11
- 23 DPP. 2. 10
- 24 DPP. 2. 6, 2. 17
- 25 DPP. 2. 17
- 26 DPP. 2. 18
- 27 DPP. 2. 19
- 28 DPP. 2. 2
- 29 DPP. 2. 4
- 30 DPP. 2. 3
- 31 DPP. 3. 1
- 32 DPP. 3. 3, 3. 4, 3. 5
- 33 DPP. 3. 5
- 34 DPP. 3. 9
- 35 DPP. 3. 11
- 36 DPP. 3. 8
- 37 DPP. 3. 11

- 38 DPP.4.1
39 DPP.4.7
40 DPP.4.11, 4.12
41 DPP.4.2
42 DPP.4.3, 4.6
43 DPP.4.20
44 DPP.4.8
45 DPP.4.3
46 DPP.4.5 独裁官 dictatorは元来、共和政ローマにおいて非常時に置かれる強い権限をもった統治者のことであり、ステウコはこの語から（ヒトラーやムッソリーニではなく！）現実にもその地位についたカエサルを連想したはずである。
47 DPP.4.17
48 DPP.5.1
49 DPP.5.1, 5.2
50 DPP.5.1
51 DPP.5.1
52 DPP.5.8
53 DPP.5.12
54 DPP.6.5
55 DPP.6.6
56 DPP.6.8
57 DPP.6.15
58 DPP.6.9
59 DPP.6,10-12
60 DPP.7.12, 7.19
61 DPP.7.2
62 DPP.7.5
63 DPP.7.5
64 DPP.7.4
65 DPP.7.9, 7.10, 7.13
66 DPP.7.22
67 DPP.8.3-5
68 DPP.8.6, 8.7
69 DPP.8.8-13
70 DPP.8.25
71 DPP.8.35, 8.38
72 DPP.8.39
73 DPP.8.29
74 DPP.9.1
75 DPP.9.5
76 DPP.9.9-13
77 DPP.9.14 後にプロティノス、ピロラオス、シンプリキオス、アレクサンドロスたちの魂の不死論も吟味されている。DPP.9.20-23参照。
78 DPP.9.15, 9.16
79 DPP.9.15
80 DPP.9.32
81 DPP.9.3
82 DPP.9.4
83 DPP.10.1
84 DPP.10.2
85 DPP.10.9
86 DPP.10.2
87 DPP.10.3
88 DPP.10.11
89 DPP.10.4, 10.5
90 DPP.10,17, 10.18
91 DPP.10.20

- 92 DPP.10.19
- 93 DPP.10.26, 10.27
- 94 DPP.3.4
- 95 TP.12.1.14, O.2.1826, HD.46-50参照。
- 96 “Ex Platone de bonorum, malorum a future sorte. Testimonium eius hanc Theologiam priscam esse.” (DPP.10.22) “De poenis ad inferos, ex Plutarcho. De Daemonibus carnificibus. De praemiis aeternis. Hanc Theologiam esse priscam.” (DPP.10.26)
- 97 “Priscam Philosophia, Deum appellasse ipsum esse: consensus a eius cum Theologia vera.” (DPP.3.7)
- 98 “Eadem probation ex Priscis Philosophis, de laudibus divinis, ab eis celebratis, quod sit unus Deus, quod Mens Animatioque Universi, principium, medium, finis, ex Pythagora, & Archyta, Philolao, & Asclepio, Acmone, Mercurio.” (DPP.3.3) “Quod prisci Philosophi super uno, ac singulari Deo, mirabiliter cum sacris litteris consenserunt.” (DPP.3.4) “Post Priscos Philosophos, qui magis Theologi dicebantur, & post ea saecula, quae a Mose, Trismegistoque, ad Platonem, Aristotelemque usque decurrerunt, in quibus adorata & cognita fuit…” (DPP.4.1)
- 99 DPP.3.10
- 100 フィチーノは、ゾロアスター、ヘルメス、オルベウス、アグラオパモス、ピュタゴラス、ピロラオス、プラトンをいにしえの神学者たちとして列挙している。TP.12.1.14, O.2.1826参照。ステウコの、フィチーノよりもピコに近い面としては、アリストテレスを非常に積極的に論じるという点が挙げられる。ただ、ピコにみられるような、スコラ哲学者たちについての幅広い議論はないようである。この点では、ステウコはピコよりも標準的な人文主義者と言えるだろう。
- 101 Copenhaver, 2016参照。
- 102 A.2.1.282, 6.4.425, GP.1.395, 3.191, 6.67など参照。
- 103 GP.3.191
- 104 W.111
- 105 W.112参照。ただライブニッツは、三位一体を「神秘」としており、この真理をプラトンが理性の駆使によって獲得したと論じているわけではない。
- 106 W.110
- 107 DPP.9.15-16
- 108 GP.6.56, 138, 550など参照。
- 109 W.113
- 110 B.P.コペンハーヴェーとC.B.シュミットによれば、ステウコは哲学に歴史的変遷を見出さず、むしろキリスト教の重要教義に帰着するような知的伝統の連続性のみを見出していた。Copenhaver and Schmitt, 1992, p. 185参照。
- 111 W.110
- 112 D.P.ウォーカーによると、ステウコは父としての神は「一」「善」であり、子は「精神」「存在」であり、聖霊は「世界靈魂」だとしていたという。そして古代の神学者たちが、ニカイア公会議で正統とされたキリスト教の教義を信じていたということを、さまざまな文献を引きながら立証しようとしたのである。しかし、ヨハネス・ベッサリオン（1403-72）はこのような姿勢に対して批判的であり、プラトンにはキリスト教の正統的な教えと両立不可能なところもあると指摘していた。Walker, 1972, pp. 38-41参照。

